

美術の窓(15)

浮世絵名品展を見て

大和文華館館長
吉川 逸 治



野風 春信筆



団十郎と家族 清長筆



おいらん 歌麿筆

春四月、太田記念美術館の御好意で浮世絵の特別展を開くことができました。肉筆画を半ば、版画を半ば、始めから終りは明治までと陳列された作品を見て参りますと、浮世絵の独自の芸術を創造した時世の力が感取されました。江戸の庶民階級の産んだ絵画で、誰でも入手できる版画、版本の挿絵が、庶民の日常生活、生活儀礼の晴れの場面もありますが、多くは、芝居、遊里、遊芸の場で、いずれも庶民の憧れの景、いささかの生活余裕を楽しまんとするの心得に応じたものです。

浮世絵師として、始めは狩野派、或はそれに土佐派など混合した町画師の流れに学んで、当世風俗、人物を描きながら、簡単粗朴で勢強い筆法に自から浮世絵流の様式が生れてきます。先行する又兵衛も、後の一蝶も彼らとは、ひと味異なり、古風であり、アカデミックなところが抜けきれません。師宣の活潑な人物の素直な表情の新鮮さの魅力には勝てません。

木版画はデッサンを簡潔にし、要所を捉えるもので、そのため新しいタイプの人像が生れ、定着しました。簡潔だからといって、高級品の粗略な真似物だったわけではありません。どんどん創造してゆ

く画師たちの勢よい筆鋒から奔り出たものです。

かくて、格式厳しい男性的な武家の都に、武家衆に対抗して意地を張る旦那衆、庶民衆の要求する絵と人の姿が出来上りました。画題は遊里と歌舞伎だけが理想境とされたのではありません。和歌も、俳諧、漢詩の教養も、諸芸稽古事とともに画師の関心をひかねばならぬこととなりました。

新しい芸術には、次々に課題が加えられて、次第に手がこんで来ます。色が筆で塗られ、次いで色摺が現れる。しかし、力強い張りのある背筋の通った姿勢の人体は崩しません。意地と知恵が技を支えるのです。

春信が鶯娘の如き可憐な男女を陶然たる配色秩序のうちに納める錦絵を出しても、人体のデッサンは犯しがたい威厳があります。緻密に計量された空間と人体との釣合、奥行との構成、人体の厚味、重さ、これらを眼に感じ、識らせる配色の関係、色の強さ、明るさの計量といった数々の精神的操作、その経験の蓄積は大変なものだと感嘆させます。手の技、眼の精しさ、根気、そして何よりも、すべてを統合する思考を導く彼の聡明さ、それはすべての特色ある浮世

絵画家に要求されたところですが。潑刺たる生活の場に人間を描いて、品格を添えるのは清長に及ぶものはないでしょう。

画面一ぱいに堂々と、姿勢のよい人物群像を旋律的秩序をもって活かします。浮世絵評論家の云われる如く、程よい比例を考案して彼独特の丈高い人物像を作り、筆意爽やかに頭のとっぺんから足の爪先まで、動勢が通って快く感じられます。

ここでも、人物の配置、遠近の関係、構図と、なかなかの計量、考慮が払われ、この知的操作によって、生活の自信に満ちた現実の人人の姿をもとに創作がなされます。

歌麿は、生活のなかの人々から女人、個人の生態へと注意を集めます。そして、半身像から顔へと中心を進め、心の機微へと深入りします。観察は各々の個性を顔の細部、髪、胸元、肉肌、衣裳、形と質といよいよ細かく、しかも対象の性格とすべて一致して生かされ、精神も肉体も物質も一体と化す作家の意図に応じる木版技巧の機微は絶頂に達します。

人間性の機微を追求して、人間悪まで墮ちると、浮世絵は風景版画に方向転換させられます。

北斎、広重の版画が、旅が盛ん

なる時世に迎えられるのは当然ですが、ここでも北斎の強靱な知性、広重の感受性は浮世絵版画に独創的な表現を授けます。

これがフランスの画家に注目される世界性を発揮しますが、それは司馬江漢らの西洋遠近図法を苦心して体得した業績を学びながら、彼らの風景版画が西洋画と共通する骨格を備えたからで、しかも薄暗い半色調を追放して、春信流に明色配合で西洋流の空間構成を可能ならしめたからです。ルネサンス以来の明暗調の空気遠近法が、モネたちが探求していた彩られた光線による遠近法に改められ、色価に拠る絵画が発する契機になるのです。

その上、富嶽一つで三十六景、百景と作品を創作する現象に対処する態度は、モネに連作を試みさせ、印象派が人々の感受性を改めるのみならず、思索家に対象と意識の関係を考えさせることを促します。さらに北斎漫画は庶民生態の千種万様を尽し、「人間喜劇」を图示せるものに外ならず、彼の画の指南書の幾何学主義とともに、江戸下町の陋屋に転々と移り住んだ老画描きの知的関心が西欧の画人、文人のそれと通ずるところあるは、興味深きことです。

季刊 美のたより No.71

昭和60年 5月10日

発行 大和文華館